

「チューラーロンコーン大学スプリングスクールプログラム参加報告書」

京都大学工学研究科修士2年 植島 慎介

1.学習成果

私は今回のタイへの渡航前にタイでの滞在経験は無く、その知識はほとんどなかった。また、語学に関しても、渡航前の事前語学研修を受講したのみであった。まず、今回の派遣に参加して、語学力が向上した。これは、1回3時間のタイ語講座を合計7回受講することによって、タイ語の発音や文法、単語等を理解することができたからである。タイ語講座に加えて、日本語専攻のタイの学生とタイ語を用いて積極的に話しかけたことも語学力向上につながったと考える。実際、日本でタイ語を学ぶより、タイで学ぶことで語学力は飛躍的に向上するようになったと感じた。なぜなら、疑問点をタイ人に聞くことで即座に解決することができることに加え、普段の生活でタイ語に触れる機会が日本と比較して圧倒的に多いからである。したがって、タイ語に限らず、語学の習得の際には、実際に現地に滞在することが効率的であると考えられる。これが難しい場合には、日常生活でその言語に触れる時間や機会を積極的に増やす必要があると言える。

次に、国際理解への意欲が渡航前と比較して、より高まったと考える。今回は2週間という短期の留学であったため、実際にタイの文化や歴史を十分に学べることは出来なかった。そのため、タイの歴史や他国(主に日本)との関係等についての知識をより深めたいと感じている。さらには、タイだけでなく、諸外国の文化や歴史についても同様に理解を深めたいと感じている。また、このような学習意欲は、今回のプログラムに参加し、タイの文化に実際に触れた結果、生じたものである。したがって、今回のような国際交流に関するプログラムに学部時代から積極的に参加していれば、私の大学および大学院での学習態度や意欲は大いに違ったものであったと考える。

最後に海外留学、特に長期の海外留学についてはより関心を抱くようになった。長期の海外留学についてより関心を抱くようになった。私は3月に大学院を卒業予定であり、4月から社会人として働くことが決まっているので、長期の海外留学に行くことはできない。しかしながら、もし学生生活がこれから続くのであれば、長期の海外留学を視野に入れていたと考える。なぜなら、短期の海外留学では得られない経験が長期留学では可能であり、異文化に触れる機会がより多くなると考えたからである。例えば、長期留学では、行動の範囲が広がると考える。留学先の大学付近のみならず、大学から離れた地域にも足を運ぶことができ、国内での文化の違い等も学ぶことが可能だろう。さらには、その国の隣国等にも休暇等を用いて、容易に訪問することができ、非常に良い経験をすることもできる。したがって、私は長期の海外留学には非常に関心を抱いた。

2.海外での経験

タイの滞中で、多くの公共交通を利用した。一般的なバスや電車、地下鉄は観光の際に頻りに利用した。外国の公共交通は遅れることが多いと聞いていたが、タイ(バンコク)ではそのようなことはなく、時間通りに運行していた。バス等の他に、バイクの後ろに乗って目的地まで送迎してくれるバイクタクシーやバイクの後ろに屋根付きの座席を設置することで、大人数の乗車が可能なトゥクトゥクも主要な移動手段であった。これらは日本では利用できないので、貴重な経験であった。さらに、バンコクには、チャオプラヤ川が流れており、船での移動もあった。以上のような、様々な公共交通を利用した。

3.プログラム内容

本プログラムの内容は以下の通りである。まず渡航前にタイ語の会話教室を受講した。そして、渡航後はタイの歴史や文化等の授業を座学形式で受講した。また、タイ語の講義を座学形式で受講した。この講義は合計7回で、1回の講義時間は3時間であった。加えて、日本で流行っている物や事柄について、日本語初級のタイ人学生の前でスピーチをした。講義以外では、アユタヤやワットプラケーオ等の世界遺産を訪れることで、タイの歴史や隣国との関係性について学んだ。また、タイの伝統料理(ソムタム)を実際に作ることで、料理や調理方法、食材等の知識を深めた。得られた知見等を踏まえて、現地の日本語専攻の学生と、日本とタイの価値観や作法、趣味嗜好の違いについて話し合い、最終的に発表した。

4.進路への影響について

2で先述の通り、私は翌月から社会人として働くことが決まっているので進路への影響は無いと言える。ところで、本プログラムは今後のキャリアプランに大きく影響した。本プログラムに参加前から、海外で働くことに抵抗はなく、興味はあった。その興味はより一層増したと言える。これは、海外で働くことで、様々な価値観の異なる人たちと仕事をすることで、人間的に成長で

きると確信したからである。

最後に、今回のプログラムで渡航前から渡航後までお世話になった京都大学の関係者の皆様と滞在中に講義や日常生活でお世話になったチュラーロンコーン大学の関係者の皆様にご場をお借りして御礼を申し上げます。